原　著

特別養護老人ホームに入所している認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様

藤　村　眞　紀（高知県立大学看護学部）
石　橋　みゆき（千葉大学大学院看護学研究院）
佐々木　ちひろ（千葉大学大学院看護学研究院）
山　﨑　由利亜（千葉大学大学院看護学研究院）
正　木　治　恵（千葉大学大学院看護学研究院）

本研究の目的は，特別養護老人ホーム（以下，特養）に入所中の認知症を有する高齢者と家族との面会の有り様を明らかにすることである。

研究対象者は，特養に入所中の認知症を有する高齢者（４名）とその家族（７名）であり，データ収集は参加観察法を用いた。研究者は，認知症を有する高齢者に特養の看護師の一員として関わり，家族との面会の有り様を明らかにするために，面会時・面会前後の認知症を有する高齢者と面会時の家族の発言，行動，表情を観察した。観察内容をもとに作成したトランスクリプトを，質的記述的に分析した。個別分析では，４名の高齢者それぞれの家族との面会の有り様を明らかにし，その個別分析をもとに，本研究における認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様を求めた。

結果として，本研究の対象となった認知症を有する高齢者たちは，家族が一緒にいる時と，一緒にいない時では，異なる反応を示していた。そして，認知症を有する高齢者は，家族との面会を通して，家族からの愛情や自分 への期待を感じる中で，自らの生き様を貫き，生きていく意欲が喚起され，その思いに応えようとしていたと考えられる。認知症を有する高齢者と家族との面会に着目することにより，普段の関わりの中では知りえない認知症を有する高齢者のその人らしさを理解でき，個別性に合わせたケアの検討が可能となる。

KEY WORDS：dementia，family visit，nursing home

Ⅰ．はじめに

平成30年版高齢社会白書によると，総人口の27.7%を高齢者が占め[1]，認知症を有する高齢者数も増加の一途を辿っている[2]。このような状況の中，介護施設等，高齢者向け施設の定員数は，年々増加しており，施設の定員数は，特別養護老人ホーム（以下，特養）が518,273人と最も多くなっている[3]。平均在所日数も1,405日と最も長くなっており[4]，入所者の大部分が，認知症を有している[5]と言われている。特養の半数以上は看取りのケアに取り組んでいると言われており[6]，特養に入所した者は，人生の最期を特養で過ごす可能性が高いと考えられる。また，特養での生活については，「職員が入居者を大切にしてくれる」，「入居者の意思，自己決定が尊重されている」という点が重視されている[7]。以上より，特養で人生を締めくくる人への，一人ひとりに合わせたその人らしいケアの提供が求められていることが窺える。

認知症を有する高齢者は，施設入所後には家族との面会を楽しみにしたり，一方で，自宅に戻りたい気持ちが芽生えたりしている[8]。認知症を有する高齢者にとっての家族とは，かけがえのないものであり，家族への一体感は，認知症になってからも強く残っており，家族は，自分の歴史にピッタリ寄り添ってきた何にも替えがたい存在なのである[9]。施設に入所している認知症を有する高齢者にとって，家族との面会には重要な意味があり[10]，入所前の環境とは全く異なる環境に身を置く中で，精神的な寂しさを緩和したり，高齢者自身の生きがいや喜びに影響したりする貴重な機会になっていると考える。

そのような貴重な場である家族との面会において，認知症を有する高齢者がどのような姿を示し，何が起きているのかということは明らかではない。本研究において，特養に入所中の認知症を有する高齢者の視点に立ち，家族との面会について明らかにすることにより，認知症を有する高齢者を尊重したその人らしいケアを提供するための示唆が得られると考えた。

Received : 3. 19. 2021　Accepted : 2. 1. 2022.　　doi : 10.20776/S13448846-28-1-P1

Ⅱ．研究目的

特別養護老人ホームに入所している認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様を明らかにする。

Ⅲ．用語の定義

「家族との面会の有り様」

研究者が施設職員として，認知症を有する高齢者と家族との面会時，その前後の場面を繰り返し観察する中で確認された反応や変化と，基本情報や他の施設職員等から得られた情報を統合し，意味内容を吟味し再構成した認知症を有する高齢者の姿。

反応とは，認知症を有する高齢者の家族との面会時における発言，行動，表情。

変化とは，１回ごとの面会の前後での認知症を有する高齢者の発言，行動，表情の様子の差。

Ⅳ．研究方法

本研究は，メルロ＝ポンティの現象学に基づいた質的記述的研究である。われわれは主体と空間との有機的な関係と，空間の根源であるあの主体と世界との取り組みとに，立ち戻らなくてはならない[11]という，具体的に生きている個々の人間存在に注目し，その人の世界におけるあり方を理解していこう[12]というメルロ＝ポンティの考え方がある。この考え方が，認知症を有する高齢者の内面世界に入り込み，家族との面会で高齢者が体験していることを明らかにできる方法であると考えた。

１．認知症を有する高齢者の選定

特養入所中の65歳以上で認知症の診断のある者，もしくは特養入所中の65歳以上で認知症の診断はないが，施設職員が，認知力が低下していると判断する者とした。

研究実施時の認知症を有する高齢者の認知症の程度の概要を把握するために，「N式老年者用精神状態尺度（以下，NMスケール）」を用いた。

２．家族の選定

家族とは，認知症を有する高齢者や家族の両者あるいは一者が，家族であると認識している者（結婚，血縁，同居は問わない）である。本研究では，認知症を有する高齢者の面会に２週間に１回以上の頻度で継続して訪れている者を選定した。

３．データ収集期間

2019年４月～10月

４．データ収集施設

データ収集施設は，研究者が非常勤で勤務している特養１施設であった。

研究者は，非常勤看護師として，２～３日/週で勤務しており，勤務日以外の２～３日/週，データ収集のために施設に赴いた。

５．データ収集方法

データ収集方法は，参加観察法である。

研究者は，認知症を有する高齢者に看護師の一員として関わり，面会前後では，日常ケアを提供しながら認知症を有する高齢者を観察し，面会中には，面会の場面に立ち会い，認知症を有する高齢者と家族を観察した。

家族との面会の有り様の観察は，１回の面会につき，「面会前」「面会時」「面会後」の３つの期間に分けて観察を行った。観察期間のイメージは，図１に示す通りである。

また，一人の認知症を有する高齢者とその家族の観察期間は，最長２カ月程度であり，その期間のうち，16～24日間（２～３日/週）の面会時間帯に「面会前」「面会時」「面会後」の有り様について観察した。言葉は身振りであり，その意義は一つの世界なのである[13]というメルロ＝ポンティの観点に基づき，言語的なコミュニケーションも，特定の状況と文脈における特定の人物の身体的な表現として捉えるべきであると考えた。認知症を有する高齢者の観察内容は，「面会前」「面会時」「面

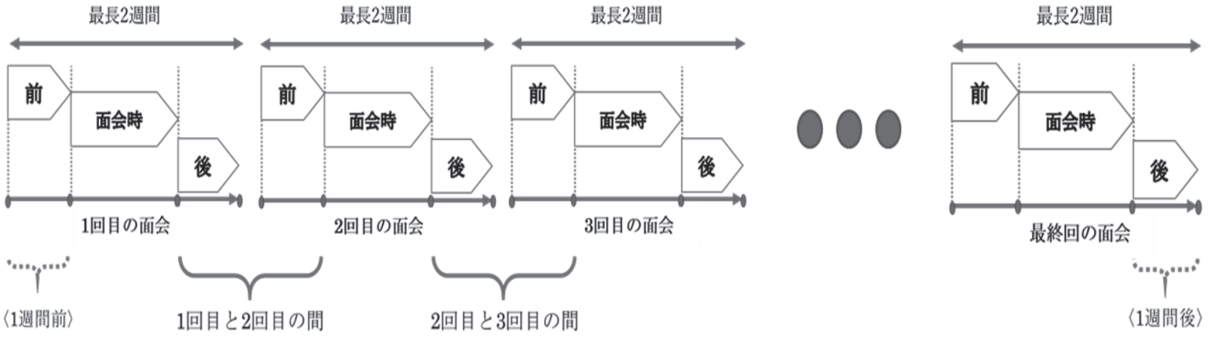

図１　家族との面会の有り様の観察スケジュール

会後」における発言，行動，表情と部屋やベッド周囲の物品の種類や配置，身に着けている物である。家族の観察内容は，「面会時」の発言，行動，表情である。観察内容に加えて，観察時に研究者が感じたり考えたりしたことをフィールドノートに記載した。

6．分析方法

分析方法は，メルロ＝ポンティの哲学に依拠した現象学の手法である西村の分析方法[14]の７つの過程を参考に以下の過程を設定した。

１）個別分析手順

①フィールドノートに記載した内容をもとに，場面ごとの物語のような文章（以下，トランスクリプト）を作成した。

１つの場面とは，研究者が意図的に認知症を有する高齢者と関わり，観察の目的が達成されるまでの一区切りである。

②家族との面会時と，それ以外の場面における認知症を有する高齢者の反応と変化について，事例ごとに作成したトランスクリプトを何度も読み返し，全体的な印象を掴んだ。

③さらに，繰り返しトランスクリプトを読み，気になる表現や繰り返される発言，表情の変化の部分に下線をつけた。下線部に注目し，面会時とそれ以外の場面の共通部分や差について吟味し，「家族との面会の有り様」を検討した。

④再度，全体の印象を確認し，トランスクリプト全体を貫く「家族との面会の有り様」を記述した。

２）全体分析手順

各事例の個別分析の内容を繰り返し読み，個別性について検討し，浮き上がった認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様についての解釈を記載した。

7．妥当性と信憑性

老人看護学の専門家と共に研究者の背景やこれまでの体験を振り返った。また，トランスクリプトの記述や分析の際には，認知症を有する高齢者にとっての面会の有り様という視点になっているか繰り返し確認し，複数名の老人看護学の専門家と解釈の内容について吟味し，妥当性と信憑性を確保した。

8．倫理的配慮

本研究は，千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て，実施した（承認番号：30－90）。

認知症を有する高齢者や家族の観察を行う際には，長時間観察し続けることにより，身体的負担や心理的負担を与える可能性があるため，研究対象者の体調や疲労の有無について日々確認した。データ収集前や参加観察実施以外の期間，研究者が研究対象者と関わることにより，顔なじみの関係性をつくり，観察による負担を最小限にするように配慮した。研究協力への参加は自由意思であり，協力の有無が施設での生活に一切影響しないことを説明した。研究協力への同意確認は，事前の参加観察方法の説明時と，面会場面への立ち会い毎に両者の同意を得た。

Ⅴ．結　果

１．データ収集施設の概要

データ収集施設は，X県の郊外にあり開設して20年以上経過している。入所者数は，100名である。多床室のみで構成されており，２階建てで４ユニットに分かれている。認知症の有無でのユニット分けなどは行われていない。面会時間帯は，９時から18時となっている。

２．研究対象者の概要

今回，研究対象候補者と考えられた者は，100名の入所者のうち６名であった。そのうち，研究協力の同意が得られた４名を研究対象者とした。対象者については，表１に示す。

3．家族との面会の概要

家族との面会については，表２に示す。

4．分析結果

１）個別分析

斜体の記載は，トランスクリプトの場面の一部である。

(1) A氏の家族との面会の有り様

A氏（70歳代，男性）には，妻と長男の面会があり，面会のリズムや頻度は確立されていた。妻は，A氏の体調を気遣い，便秘予防のための食品を差し入れしたり，認知機能や体力の低下予防のためのクイズやリハビリ，散歩を提案したりしながら，A氏に刺激を与えようとしていた。一方，長男は週に一度面会に来て，A氏の好物であるパンを差し入れ，同じ空間で座っていた。

このような妻と長男の面会があったA氏は，面会時以外は，病院にいると認識しながら，周囲の施設職員や入所者の発言に耳を傾けたり，近くを通りかかる者をじっと見たりして過ごし，笑顔で周囲の人々と話している様子が多く観察された。

場面④

「うちの（妻）はよく来るよ。この病院で一番来てるんじゃないか」と自信を持っている様子で力強く研究者を見て言った。

長男のことは，自分の好物を持って来てくれて，ゆっ

表１　研究対象者の概要

対象者	A氏	B氏	C氏	D氏
年齢	70歳代	90歳代	70歳代	90歳代
性別	男性	女性	女性	女性
入所期間	2年	2年	2年	1年
入所までの経緯	自宅で妻と2人暮らしをしていたが，脳梗塞の手術後，特養に入所した.	大腿骨骨折にて手術した後，老健を経て特養に入所した.	デイサービスなどを利用し自宅で暮らしていたが，夫不在時に一人きりで過ごすことが難しくなり特養へ入所した.	独居ではあったが，近所に住む次男が泊まり込みで介護していた．次男の介護による疲れが心配され，特養に緊急入所した.
要介護度	要介護4	要介護4	要介護3	要介護3
ADL	食事は一部介助，それ以外は全介助	食事や移乗，排泄などの全て一部介助	食事や移乗，排泄などの全て全介助	食事や移乗，排泄などの全て一部介助
認知症疾患	血管性認知症	血管性認知症	アルツハイマー型認知症	血管性認知症
NMスケール (30点満点)	11	14	10	21
面会前後の会話の差	普段はつじつまが合わないことがある. 面会時は，家族が話す内容を懸命に覚えようとする.	普段は，自ら話すことは少ない. 面会時は，家族に質問したり助言したりしている.	普段は，呼びかけに反応しないときがある. 面会時は家族をじっと見て話している.	普段は，簡単な会話ができるが，つじつまが合わないことがある. 面会時は，家族と話しながら最近の出来事を思い出している.
既往歴	脳梗塞，心房細動， 僧帽弁狭窄症， 左股関節脱臼	脳腫瘍，脳内出血， 左大腿骨骨折	なし	多発性脳梗塞，糖尿病， 糖尿病性腎症， 変形性脊椎症， 乳がん，大腸がん

表２　家族との面会の概要

対象者	A氏	B氏	C氏	D氏
面会者	妻・長男	長男・長女	夫	次男・長女
面会頻度	妻：2～3回/週 長男：1回/週（週末）	長男：1回/週（週末） 長女：1回/週	夫：2～3回/週	次男：1～2回/週 長女：数回/月
1回の滞在時間	30～40分	30～60分	30～40分	120～240分
面会時間帯	妻・長男：おやつの時間（14～15時台）	長男・長女：おやつの時間（14～15時台）	夫：夕食前（16時台）	次男:昼食時（11～13時台） 次男・長女：外来受診時
面会観察期間	50日	72日	123日	62日
面会回数	妻：19回 長男：9回	長男：10回 長女：10回	夫：23回	次男：18回 長女：6回
研究者の面会観察回数	5回	6回	6回	5回

くりテレビを見る時間を過ごす家族の一員だと認識していた。言葉を多く交わさずともテレビを見ながら同じ空間で過ごすA氏と長男は，まるで居間に居るような時間を過ごしていた。

A氏の妻は，他の入所者や施設職員からも，施設内で一番多く面会に来ていることが知られており，A氏も面会に来てくれる妻がいることを誇らしげに思っている様子がみられた。そのような妻との面会時には，普段とは異なる様子が観察された。観察期間において，長男や施設職員に対して表情を歪ませて拒否するような言動は認められなかった。しかし，妻に対して眉間に皺を寄せながら強く拒否する様子が見られた。このことは，以前から妻とは言いたいことを言える関係性が築かれており，施設に入所して離れて暮らすようになっても，その関係性が維持されていたためと考えられた。そのように心を許している，言いたいことを言える妻と定期的に会うことによって，A氏は，正直に気持ちを表出する機会を得ていた。

場面⑤

「こんにちは。うちの親父がそこにいるんだ。」と15m先の部屋を指さして言った。

場面⑥

「そこに，娘が来てるんだ。」とA氏は目を見開いて答えた。

妻や長男の面会後には，実際に来てはいないが娘や姉，親父が来たと話す様子がみられた。家族の誰が面会に来たのかを覚えていたわけではないが，家族の誰かと会っていた，という感覚がA氏の中に面会後に残っていた。このような言動は，A氏が，面会の後に家族のことを思い出したり，家族との繋がりを感じたりしたため確認されたのだと思われた。

妻は「また，来るね。」と言って帰るのみで，次の面会を約束しているわけではなく，面会に来る曜日は不規則であった。しかし，研究者が観察期間中に何度かA氏に妻が面会に来るかを尋ねたところ，A氏が「来ない。」と言った日には妻の面会はなく，A氏が「来る。」や「来るかな。」と言った日には必ず妻の面会があった。A氏は，妻が来る日と来ない日があり，数日おきに必ず会いに来てくれるということを確信し，そのことによって，安心感を得ており，平穏な生活を継続していたと考えられた。

(2) B氏の家族との面会の有り様

B氏（90歳代，女性）には，長男と長女の面会があり，長男，長女共に，おやつの時間（14時台）に面会に訪れ，長男は，ヨーグルト飲料，小さいシュークリームやようかんを，長女は，せんべいやプリンを持って来ていた。長男とは畑や家族の話をし，長女とは長女自身や家族の話をしていた。

このような長男と長女の面会があったB氏は，面会時以外は，車椅子に乗車して前屈みになり，閉眼して過ごすことが多かった。施設職員が声をかけても，眠い時には声をかけられていることに気づいてはいるが，頑張って起きようとする様子は見られなかった。

場面③

「大事な時期だから注意するんだ。」と妊娠している孫のことを心配していた。

「畑はがんばったー。」と今までの人生を振り返っている様子で目じりに涙をためて言った。

場面⑮

「お前（長女）のとこは，（お姑さんに）仲良くしてもらって恵まれてるなあ。」とB氏は長女の方は見ずに視線を下に向けて言った。

家族との面会時には，上体を起こし，両目を開けて面会に来ている家族をじっと見て，差し入れのおやつを食べながら，話をしていた。B氏は，長男に，人生をかけて大事に耕してきた畑の最近の様子を聞く中で，畑を通しての自身の経験を思い出し，時には長男へのアドバイスなどをしていた。その様子からは，現在は施設の中にいて自分の畑を実際に耕すことはできないが，畑と離れていながらも，育つ作物に思いをはせ，畑との繋がりを感じ取っていたように思われた。

長男との面会時には，B氏の姉妹や家族の近況について毎回話していた。家族みんなの健康状態を気にかけ，ひ孫が生まれることを喜んだり，時には子どもたちを心配したりする様子が見られた。長女との面会時には長女と姑の関係を気にしており，時には長女と姑の関係を羨んだり，旅行に行くという長女を心配したりする様子が見られた。B氏は，特養に入所して家族と離れていながらも，家族の状況を把握し，時には心配したり喜んだりしながら，母・祖母・曾祖母の役割を果たしていた。

長男は，施設にいるB氏が，孫にとっての祖母としての役割が果たせるようお年玉を準備することをB氏に提案していた。一方で，長女は，一人では面会に来られないB氏の姉や妹，姪を車に乗せて連れてきて，施設内で姉妹と会える貴重な時間を作っていた。そのことに対して，B氏は感謝し，時には涙を流して喜んでいた。B氏は，姉妹や孫の元気な姿を確認し，姉妹でしか分かち合えないような話をする機会を得て，姉妹の絆を再確認したり，孫の元気な姿を確認したりする中で，生きる意欲を高められていたと考えられた。

家族と会っている時間が1時間以上になると，B氏は眠気に襲われるときもあった。家族に声をかけられながら，B氏自身も起きていたい様子で，眠気と戦っている姿が観察された。その姿からは，家族と会って話す時間をこの上ない喜びとし，その時間をできるだけ長く続けようとするB氏の思いが伝わってくるように思われた。

(3) C氏の家族との面会の有り様

C氏（70歳代，女性）には，夫の面会があり，面会時間は16時過ぎの夕食前の時間帯であった。夫は，面会に訪れるとC氏と共に行うことを決めていた。車椅子に乗車しているC氏と向かい合って座り，鉄道唱歌，C氏の小学校校歌，百人一首，住所，卒業学校名，職場名，掛け算など，毎回順番は変わるが，一通り同じ内容について，問題を出し正解が言えるまで，答えを教えたり質問したりして過ごしていた。

このような夫の面会があったC氏は，普段は，食事やお風呂の際に車椅子に乗車する以外はベッド上で臥床して過ごしていた。臥床時には閉眼して寝ていることもあ

るが，開眼して過ごしていることが多かった。そして，臥床しているC氏に施設職員が声をかけても，C氏は表情を変えずに返事をすることが多く，一部の施設職員には笑顔を見せる様子が見られた。

場面③

夫が拍手をしながら「はい。歌えましたね。上手い，上手い，上手い。」と笑顔でC氏に語り掛けた。C氏はニコニコと微笑みながら夫を見ていた。

場面㉒

「旦那さんから肩もみしてもらって，良かったですね。」と研究者がC氏に声をかけると，C氏はパッと表情を変えて，今まで研究者が見た中で一番の笑顔を見せた。

C氏は，夫が面会に来た時に，自分と親しい人が来ていると認識しているのか，普段は表情の変化が少なかったが，表情が豊かになり，笑顔になる頻度が高かった。そして，目の前で自分のことや自分が懐かしく思うことについて，一生懸命に質問してくる夫の姿をじっと見ていた。面会時に，夫は，C氏の認知機能の維持を目的として，C氏が得意だった百人一首や，今までの人生で覚えてきた住所や学校の校歌などを，C氏が忘れないようにと問題にして毎回質問しC氏が答えるのを待っていた。夫は，C氏が正解を答えると笑顔で「正解。」と拍手し，答えられない場合には繰り返し答えを教えながら，微笑みかけてC氏が正解を答えるのを待っていた。面会のたびに，C氏が正解を答えるまで，夫は繰り返して問題を出していたが，C氏がその夫の問いかけを無視して答えないという様子は観察されなかった。むしろ，夫が一生懸命問題を出して，正解を待って向かい側に座っている姿や，正解を答えられたときに満面の笑みで拍手をしながら喜ぶ夫の様子をC氏はじっと見て，時には一緒に微笑んでいた。

そのような姿からは，C氏は，目の前に自分に関心を向けてくれる人がいることを感じ取り，自分が大切にされているという感覚を得ていたと考えられた。そして，自分のことを大切にして，色々問いかけてくれ，正解を答えられると心から喜んでくれる目の前の夫の自分への期待を感じ取り，その期待にできる限り応えたいと思っていたからこそ，何度も繰り返す夫の声掛けに対し返事をし続けていたと考えられた。

(4) D氏の家族との面会の有り様

D氏（90歳代，女性）には，次男と長女の面会があり，次男は，昼食前に訪れ，トイレ誘導や昼食摂取の介助を行い，食事を済ませるとD氏とともに社会問題や家族の話をして過ごしていた。長女は，外来受診日で都合が合う日に次男と共に訪れて，病院に一緒に行き，外来受診日以外では，２人で昼食前の時間に訪れ，D氏や次男と話をしながら，D氏が昼食を食べる様子を見守り，時には次男がD氏を手伝いすぎる様子を見てD氏のために手伝いすぎるのは良くないと，止めることもあった。

このような次男と長女の面会があったD氏は，座っている席の周囲やユニットの中に話ができる入所者が少ないこともあって，普段は車椅子に座ってじっと周囲を見つめていたり，眠い時には前屈みになって眠ったりしていた。施設職員の声掛けには笑顔で答え，いつも周りの入所者の様子も気にしているようで，施設職員が他の入所者のケアをしている様子をじっと見ていることがあった。D氏は入所するまで，自宅で次男の介護を受けていたが，次男の介護負担をケアマネジャーから心配されて特養に緊急入所していた。そのような背景も関係してか，D氏は常に笑顔を絶やさず，周囲を気遣っていた。その姿からは，施設職員や他の入所者と波風立てずに過ごしたいと考えているように思われた。

場面⑭

「僕が来ると全部食べれるからね。はい。」と言いながら，D氏の口にスプーンを近づけた。D氏は，苦笑いを浮かべながらも次男が一生懸命食べさせる姿を見ながら食べていた。

場面⑥

D氏は次男と長女が話す様子を聞いていた。話している途中で，長女が「私たちばっかり話してるわ。」と言った時には，D氏は「私は聞いてるから。」と笑っていた。

周囲を気遣いながら過ごしているD氏は，次男や長女と会うことを楽しみにしていた。２人の面会時には，次男や長女が次々と話す姿を傍らで微笑ましく見つめ，２人がD氏へアドバイスをすると，D氏は全て受け入れていた。その姿からは，子どもたちから心配されたり，長生きしてほしいと思われていることを感じ取ったりしながら，家族から愛されていることを認識していたからこそ，笑顔になり，子どもたちが言うことをすべて受け入れていたのではないかと考えられる。

また，次男が昼食時に訪れ，D氏の食事介助をして，完食させることに一生懸命な様子を見て，次男をガッカリさせないようにしていた。たとえ研究者に苦笑いを浮かべるほど，満腹で自分のペースで食べたいという気持

ちがあったとしても，次男の食事介助のペースに合わせて必死に食事を食べている様子が観察された。D氏は，次男や長女の発言や話の内容を否定したり，拒否したりすることは決してなかった。そして，子どもたちが元気で長生きしてほしいと強く思っていることをD氏も分かっていたため，２人の子どもの思いに応えたいと手術をすることを受け入れていた。その様子からは，母として，心配したり気遣ったりしてくれる子どもたちに感謝しながら，自分は施設で，まだ元気に過ごしているから安心していいよと伝えているように感じられた。

２）全体分析

特養に入所中の認知症を有する高齢者は，家族との面会を通して様々な有り様を示しており，一人ひとり異なる特徴を持っていた。A氏は，今までの家族との関係を維持できる機会を得たり，平穏な生活を継続したりしていた。B氏は，畑との繋がりを感じたり，母・祖母・曾祖母の役割を果たしたりしていた。C氏は，自分に縁があることについて発したり，目の前の夫からの期待に応えようとしたりしていた。D氏は，子どもたちからの愛情を感じ取り，思いを受け止めながら元気で居続けたいと思っていた。

一方で，４名の家族との面会の有り様には共通点もあった。認知症を有する高齢者は，家族の名前や顔が一致しない場合もあるが，自分にとって大切な誰かであることは感じていた。家族との面会により，認知症を有する高齢者一人ひとりが家族から注目され，主役となれる場が生じることになる。認知症を有する高齢者が意識しているかどうか明らかではないが，家族からの愛情や期待を感じ取り，そのような家族からの思いに応えようとしていた。家族との面会は１週間のうち数時間と限られているが，認知症を有する高齢者は家族と相互に作用しながら，自分の意思を表出していた。変化の少ない特養の集団生活において，家族との面会は，意思表出できる重要な機会であり，楽しみのひと時となっていた。

Ⅵ．考　察

１．認知症を有する高齢者にとっての面会の意味

４名の認知症を有する高齢者は，家族が一緒にいる時と，一緒にいない時では，異なる反応を示した。４名の家族との面会の有り様では，それぞれの個別性が表れた一方で，共通する点も明らかとなった。本研究の対象者４名は，自宅での生活の継続が難しくなり特養に入所していた。特養という新たな住処において，面会を通して家族からの愛情や自分への期待を感じる中で，自己効力感を高められていたと考える。特養に入所している認知症を有する高齢者には，施設に入所し，入所前と違う環境に身を置くことで，周囲に気を使ったり，不安などを感じたりしながら過ごしている者がいる[15]。また，変化の少ない毎日を過ごす中で，生きる意欲がなくなっていく者もいる。本研究の対象者についても，家族との面会時以外で主体的な言動が確認されたのは，生理的欲求があるときに限られていた。

本研究の認知症を有する高齢者には，面会によって，今まで人生を共に歩んできた家族と共有している様々な出来事や事柄について考えたり，家族との関係性を維持したりする機会がもたらされていた。そのような中で，たとえ自分自身や家族，過去の出来事を明確に思い出せなかったとしても，目に見えない絆を感じ取り，今の自分，そのときの自分としての自我を統合していた。家族との面会時の認知症を有する高齢者の反応は，家族でなければ引き出せない一面であった。家族とは，お互いの心の動きを読み取り，生きてきた時間を共有してきたことで，他者には理解しにくいことも即座に理解できることが多いと言われており[16]，認知症を有する高齢者にとっても同様に，家族は長い期間を通して関係性を構築してきたからこそ分かり合える者であると考える。

以上より，特養に入所していて，１週間のうちに数時間しか家族と会えないとしても，認知症を有する高齢者は，家族との面会によって，素の自分でいられる時間を過ごしていた。家族から問題を出されたり，近況報告を受けたりする中で，自分に対する強い思いを感じ取り，これからも元気でいながら，家族の気持ちにできる限り応えたいという思いを抱きながら過ごしていたのではないかと考える。

２．家族にとっての面会の意味

研究対象者４名は，自宅での生活を継続することが難しくなり，特養に入所していた。そのような認知症を有する高齢者の家族も，面会を通して，離れて暮らしながらも家族としての繋がりを持ち続け，家族でしか共有できない時間を過ごすことができていた。本研究の家族は，認知症を有する高齢者への面会が，生活の一部となっていた。このことは，特養に入所して１年以上経過していたこともあり，家族の面会のリズムも確立されていたためと考えられる。

また，家族は，面会を通して認知症を有する高齢者が元気で暮らしていることを確認したり，面会に来たことで喜んでいる姿を見たりする中で，施設に入所させたことへの後ろめたさや罪悪感[17]を和らげることに繋がっていたと考えられる。特養に入所している認知症を有する高齢者は，持っている力を維持することが精一杯の状態

であり，日々少しずつ身体機能や認知機能が低下している。家族は，数日おきに面会に来ることによって，少しずつ衰えていく認知症を有する高齢者の姿に気づきながら，残された力や生きようとしている姿を実際に確認することができ，時には安心感が得られていたと考えられる。

3．家族との面会の施設ケアへの活用

本研究では，これまでの研究では着目されなかった特養に入所している認知症を有する高齢者と家族との面会に着目した。普段は施設職員が同席することが少ない面会の場面に意図的に立ち会い，面会前後の観察を行うことにより，認知症を有する高齢者との普段の関わりの中では知りえない，認知症を有する高齢者と家族が共有している規範や常識[18]について理解を深めることができた。認知症を有する高齢者にとって，人生の核となる部分を知ることが可能になるため，今までの人生経験を反映した一人ひとりへの異なるケア提供に繋がると考える。

家族との面会では，認知症を有する高齢者が，輝いていたころの自分を取り戻し，生き生きと家や家族について語り合い，一生懸命自分に専念する人の存在を確認し，その専心に一生懸命応えようとするなど，その人の人生の統合に向けた豊かな時間や相互作用が展開されていた。認知症ケアという側面から家族による面会の効果を考察すると，集団生活を送っている認知症を有する高齢者の一人ひとりが主役となる時間がもたらされ，自尊感情を高めることにつながるものであると考える。

また，認知症を有する高齢者が，家族との面会を通して，自らの意思を表出していることが明らかとなった。家族との面会に着目し，面会の場面に研究者が立ち会ったことにより，普段の生活の中では表現していない意思を，認知症を有する高齢者が表現していたことが明らかとなった。認知症を有する高齢者に関わる視点を少し変えることにより，一見主体性が少ないと考えられる認知症を有する高齢者であっても，自らの意思を表出しており，そのことに周囲の者が気づくことが可能となる。このことは，高齢者を主体としたとらえ方の基盤に，高齢者の個別性に対する看護師の気づきや理解，高齢者の反応に対する専門的かつ柔軟な視点からのアセスメント，および高齢者の言動を他者や環境との関係の中でとらえるとらえかたがある[19]ことと共通している。鳥田は，認知症を有する高齢者の言動や反応について，個別性の視点や心身の機能障害の視点から理解を深めることにより，高齢者を主体としてとらえることが可能になると述べている[20]。面会時の認知症を有する高齢者と家族の言動を観察したことにより，家族との面会が認知症を有する高齢者にとって自分の意思を表出できる場であり，認知症を有する高齢者の主体性に気づく貴重な機会となっていることが明らかとなった。施設職員が認知症を有する高齢者と家族との面会に着目することにより，認知症を有する高齢者の主体性の理解に繋がると考える。

本研究のデータ収集施設では，特養の約100名の入所者に対し，週に１回以上面会に来る家族は１割弱程度であり，年に１回も面会に家族が来ない高齢者もいた。家族が面会に来ない入所者が大多数を占める中で，家族が面会に来る入所者を羨ましく思う者や，自分の家族が面会に来ないことで孤独感を感じる者がいることが考えられる。そのため，家族が面会に来ない入所者が，他の高齢者の家族との面会のことを気にせずに過ごせるような環境づくりや，家族と会えず，離れていたとしても，家族との繋がりを感じることができる機会を作るというような，配慮やケア方法を検討する必要がある。

一方で，定期的に継続して面会に来る家族の存在は，認知症を有する高齢者にとって，貴重な存在だと言える。本研究を通して，面会時に認知症を有する高齢者が普段とは異なる姿を示すことが明らかとなった。このことは，面会に着目したからこそ明らかになったわけである。しかし，家族は認知症を有する高齢者の面会時以外の異なる姿を知らない可能性がある。家族と面会したことによって引き起こる面会前後の認知症を有する高齢者の反応や変化について，家族が目の当たりにすることは少ない。そのため，それらの姿について施設職員が家族に情報共有することによって，家族が面会に来ることの価値づけ，継続して面会に来ることへの動機づけに繋がる。施設職員と家族が認知症を有する高齢者の様々な姿について共有することにより、認知症を有する高齢者のより深い理解へのきっかけになり，施設職員と家族との良好な関係性を築くきっかけにもなる。このような関係性の構築により，施設職員が家族との面会場面に立ち会いやすくなる雰囲気づくりができ，新たな面会時の気づきに繋がる。

4．研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は，家族が１週間に１回以上面会に来る認知症を有する高齢者であった。認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様として，生きる意欲を喚起するというような肯定的な有り様のみが明らかとなった。しかし，特養に入所している認知症を有する高齢者に面会に来る家族には，月に１回や年に数回来る者もおり，本研究とは異なる有り様が明らかになる可能性がある。今後は，より長い観察期間を設け，家族が１週間に１回以下の頻度で面会に来る認知症を有する高齢者の面会の有り様についても明らかにし，特養に入所中の認知症を

有する高齢者の家族との面会の有り様をより深く理解したいと考える。

Ⅶ. 結　論

本研究により，特養に入所中の認知症を有する高齢者の家族との面会の有り様が明らかになった。

４名の認知症を有する高齢者は，家族との面会を通して，その人でしか表現できない有り様を示していた。そして，４名の認知症を有する高齢者は，家族との面会によって生きる意欲が喚起されていた。また，家族も面会によって，入所させていることによる罪悪感を緩和するというような影響を受けていた。

謝　辞

本研究にご協力いただいた入所者と家族の皆様，ご協力いただいた施設の関係者の皆さまに，深く感謝申し上げます。

本研究は，千葉大学大学院看護学研究科における修士論文を一部加筆・修正したものであり，研究の一部を日本老年看護学会第25回学術集会にて発表した。補助及び助成はなく，本研究に係る利益相反状態は一切ありません。

引用文献

１）平成30年高齢社会白書　第１章　高齢化の状況　第１節　高齢化の状況　１高齢化の現状と将来像，https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf（2022.2.14アクセス）.

２）平成28年高齢社会白書　第１章　高齢化の現状　第２節　高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向　３高齢者の健康・福祉，https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/pdf/1s2s_3.pdf（2022.2.14アクセス）.

３）平成29年高齢社会白書　第１章　高齢化の状況　第２節　高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向(3)　３高齢者の健康・福祉，https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1_2_3.html（2022.2.14アクセス）.

４）第144回社会保障審議会介護給付費分科会資料　参考資料２　介護老人保健施設，https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikan-shitsu_Shakaihoshoutantou/0000174012.pdf（2022.2.14アクセス）.

５）中島紀恵子監修・編集：認知症の人びとの看護，３，医歯薬出版株式会社，2017.

６）前掲５)117，2017.

７）平成28年度　老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業　特別養護老人ホームにおける良質なケアのあり方に関する調査研究事業報告書　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング，https://www.murc.jp/uploads/2017/04/koukai_170501_c10.pdf（2022.2.14アクセス）.

８）福田珠恵：老年期に痴呆症という病を生きる体験「自己の存在の確かさを求めて」病の兆候からグループホーム入居後まで，日本看護科学会誌25巻３号，41－50，2005.

９）水上侑：老いとこころのケア，佐藤眞一・大川一郎・谷口幸一編，ミネルヴァ書房，2010.

10）Marit Mjørud, Knut Engedal, Janne Røsvik, and Marit Kirkebold: Living with dementia in a nursing home, as described by persons with dementia: a phenomenological hermeneutic study, BMC Health Services Research, 17: 93, 2017.

11）M.メルロ＝ポンティ：知覚の現象学（中島盛夫），新装版，放送大学出版局，2009.

12）松葉祥一，西村ユミ：現象学的看護研究―理論と分析の実際，１，医学書院，2017.

13）前掲11)309，2009.

14）西村ユミ：看護ケアと現象学的研究，日本糖尿病教育・看護学会誌，22(1)，57－60，2018.

15）服部紀子・安藤邑恵：介護老人施設で暮らす軽度認知症のある高齢者の日常での経験，横浜看護学雑誌，４(1)，63－70，2011.

16）鈴木和子，渡辺裕子，佐藤律子：家族看護学　理論と実践第５版，日本看護協会出版会，23，2020.

17）井上修一：特別養護老人ホーム入居者家族が抱く迷いと緩和に関する研究，大妻女子大学人間関係学部紀要，13，109－115，2012.

18）鳥田美紀代，清水安子，正木治恵：意思をくみ取って援助することに困難を感じる高齢者に対する看護師のとらえ方の構造―対人援助関係の構築に焦点をあてた質的研究のメタ統合による分析―，千葉看護学会誌，12(2)，63－68，2006.

19）中島紀恵子監修・編集：新版　認知症の人々の看護，２，医歯薬出版株式会社，2014.

20）鳥田美紀代，正木治恵：看護者がとらえにくいと感じる高齢者の主体性に関する研究，老年看護学，11(2)，112－119，2007.

EXAMINING HOW FAMILY VISITS AFFECT THE BEHAVIOR OF OLDER PEOPLE WITH DEMENTIA LIVING IN A NURSING HOME

Maki Fujimura[*1], Miyuki Ishibashi[*2], Chihiro Sasaki[*2], Yuria Yamasaki[*2], Harue Masaki[*2]
[*1]: Faculty of Nursing, University of Kochi
[*2]: Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :
dementia, family visit, nursing home

The purpose of this study was to explore how family visits affected the behavior of a sample of four older people with dementia who were living in a nursing home.

The nurse researcher collected data by observing the residents when they were alone or with visiting family members; documenting their remarks, behaviors, and facial expressions; and determining how these factors differed in the two situations. During family visits, the residents seemed to feel the affection of the visiting family members and raise their self-expectations. It is possible that the feelings invoked during these visits aroused resident' desire to live as they tried to respond to the family members' wishes, while maintaining their own way of life.

Moreover, the resident' personalities were more evident during these visits than they were during their regular daily life and interactions in the nursing home. In our opinion, the information gained about residents and their personalities during these visits could be used to tailor care according to their individual needs.